

# 運

芥川龍之介



目のあらい簾が、入口にぶらさげてあるので、往來の容子は仕事場にも、よく見えた。清水へ通う往來は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓をかけた法師が通る。壺装束をした女が通る。その後からは、めずらしく、黄牛に曳かせた網代車を通つた。それが皆、疎な蒲の簾の目を、右からも左からも、来たかと思うと、通りぬけてしまう。その中で変らないのは、午後の日が暖かに春を炙つている、狭い往來の土の色ばかりである。

その人の往來を、仕事場の中から、何と云う事もなく眺めていた、一人の青侍が、この時、ふと思いついたように、主の陶器師へ声をかけた。

「不相変、観音様へ参詣する人が多いようだね。」

「左様でございます。」

陶器師は、仕事に気をとられていたせいか、少し迷惑そうに、こう答えた。が、これは眼の小さい、鼻の上を向いた、どこかひょうきんな所のある老人で、顔つきにも容子にも、悪気らしいものは、微塵

もない。着ているのは、麻の帷子であろう。それに萎えた揉烏帽子をかけたのが、この頃評判の高い

鳥羽僧正の絵巻の中の人物を見るようである。

「私も一つ、日参でもして見ようか。こう、う、だつが上らなくちゃ、やりきれない。」

「御冗談で。」

「なに、これで善い運が授かるとなれば、私だつて、信心をするよ。日参をしたつて、参籠をしたつて、そうとすれば、安いものだからね。つまり、神仏を相手に、一商売をするようなものさ。」

青侍は、年相応な上調子なものをいをして、下唇を舐めながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。——竹藪を後にして建てた、藁葺きのあばら家だから、中は鼻がつかえるほど狭い。が、簾の外の往來が、目まぐるしく動くのに引換えて、ここでは、甕でも瓶子でも、皆緒ちやけた土器の肌をのどかな春風に吹かせながら、百年も昔からそうしていたように、ひっそりかんと静まっている。どうやらこの家の棟ばかりは、燕さえも巢を食わないらしい。……

翁が返事をしないので、青侍はまた語を継いだ。「お爺さんなんでも、この年までには、随分いろん

な事を見たり聞いたりしろうね。どうだい。観音様は、ほんとうに運を授けて下さるものかね。」

「左様でございます。昔は折々、そんな事もあつたように聞いて居りますが。」

「どんな事があつたね。」

「どんな事と云つて、そう一口には申せませんがな。——しかし、貴方がたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもございませんまい。」

「可哀そうに、これでも少しは信心気のある男なんだぜ。いよいよ運が授かるとなれば、明日にも——」

「信心気でございませうかな。商売気でございませうかな。」

翁は、めじりしわ 眦に皺をよせて笑つた。捏ねていた土が、つぼ 壺の形になつたので、やつと気が楽になつたと云う調子である。

「神仏の御考えなどと申すものは、貴方がたくらいのお年では、中々わからないものでございますよ。」

「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くんだあね。」

「いやさ、神仏が運をお授けになる、ならないと云う事じやございません。そのお授けになる運の善し悪しと云う事が。」

「だつて、授けて貰えばわかるじやないか。善い運だとか、悪い運だとか。」

「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねましようて。」

「私には運の善し悪しより、そう云う理窟の方がわからなそうだね。」

日が傾き出したのであろう。さつきから見ると、往来へ落ちる物の影が、心もち長くなつた。その長い影をひきながら、頭に桶をのせた物売りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産らしい桜の枝を持っていた。

「今、西の市で、續麻の廊を出している女なぞもそうでございますが。」

「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつているじやないか。」

二人は、暫くの間、黙つた。青侍は、爪で頤のひげを抜きながら、ぼんやり往来を眺めている。貝殻

のように白く光るのは、大方さつきの桜の花がこぼれたのであろう。

「話さないかね。お爺さん。」

やがて、眠そうな声で、青侍が云った。

「では、御免を蒙つて、一つ御話し申しませうか。また、いつもの昔話でございませうが。」

こう前置きをして、陶器師の翁は、徐に話し出した。日の長い短いも知らない人でなくては、話せないような、悠長な口ぶりで話し出したのである。

「もうかれこれ三四十年前になりました。あの女がまだ娘の時分に、この清水の観音様へ、願をかけた事がございました。どうぞ一生安楽に暮せますようにと申しましてな。何しろ、その時分は、あの女もたった一人のおふくろに死別れた後で、それこそ日々の暮しにも差支えるような身の上でございましてから、そう云う願をかけたのも、満更無理はございません。」

「死んだおふくろと申すのは、もと白朱社の巫子で、一しきりは大そう流行つたものでございますが、狐を使うと云う噂を立てられてからは、めつきり人も

来なくなつてしまつたようでございます。これがまた、白あばたの、年に似合わず水々しい、大がらな婆さんでございましてな、何さま、あの容子じゃ、狐どころか男でも……」

「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺いたいですね。」

「いや、これは御挨拶で。——そのおふくろが死んだので、後は娘一人の痩せ腕でございますから、いくらかせいでも、暮の立てられようがございませぬ。そこで、あの容貌のよい、利発者の娘が、お籠りをするにも、襤褸故に、あたりへ気がひけると云う始末でございました。」

「へえ。そんなに好い女だったかい。」

「左様でございます。氣だてと云い、顔と云い、手前の欲目では、まずどこへ出しても、恥しくないと思いましたかな。」

「惜しい事に、昔さね。」

青侍は、色のさめた藍の水干の袖口を、ちよいとひつぱりながら、こんな事を云う。翁は、笑声を鼻から抜いて、またゆつくり話しつづけた。後の竹籤

では、頬に鶯が啼いている。

「それが、三七日の間、お籠りをして、今日が満願と云う夜に、ふと夢を見ました。何でも、同じ御堂に詣つていた連中の中に、背むしの坊主が一人いて、そいつが何か陀羅尼のようなものを、くどくど誦していたそうでございます。大方それが、氣になつたせいでございましょう。うとうと眠氣がさして来ても、その声ばかりは、どうしても耳をはなれませぬ。とんと、縁の下で蚯蚓でも鳴いているような心もちで——すると、その声が、いつの間にやら人間の語になつて、『ここから帰る路で、そなたに云いよる男がある。その男の云う事を聞くがよい。』と、こう聞えると申すのでございませぬ。

「はつと思つて、眼がさめると、坊主はやつぱり陀羅尼三昧でございます。が、何と云つていゝのか、いくら耳を澄ましても、わかりませぬ。その時、何気なく、ひよいと向うを見ると、常夜燈のぼんやりした明りで、観音様の御顔が見えました。日頃拝みなれた、端嚴微妙の御顔でございますが、それを見ると、不思議にもまた耳もとで、『その男の

云う事を聞くがよい。』と、誰だか云うような氣がしたそうでございます。そこで、娘はそれを観音様の御告だと、一図に思いこんでしまいましたげな。」

「はてね。」

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だらだら下りの坂路を、五条へくだらうとしますと、案の定後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でございましたが、生憎の暗で、相手の男の顔も見えなければ、着ている物などは、猶の事わかりませぬ。ただ、ふり離そうとする拍子に、手が向うの口髭にさわりました。いやはや、とんだ時が、満願の夜に當つたものでございます。

「その上、相手は、名を訊かれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。ただ、云う事を聞くと云うばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるようにして、つれて行きます。泣こうにも、喚こうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がございませぬ。」

「ははあ、それから。」

「それから、とうとう八坂寺の塔の中へ、つれこま

れて、その晩はそこですごしたそうでございます。  
——いや、その辺へんの事なら、何も年よりの手前などが、わざわざ申し上げるまでもございますまい。」

翁おきなは、また眦めじりに皺しわをよせて、笑った。往来の影は、いよいよ長くなつたらしい。吹くともなく渡る風のせいであろう、そこここに散つている桜の花も、いつの間にかこつちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、点々と白い色をこぼしている。

「冗談云つちやいけない。」

青侍は、思い出したように、頤あごのひげを抜き抜き、こう云つた。

「それで、もうおしまいかい。」

「それだけなら、何もわざわざお話し申すがものはおございませぬ。」翁おきなは、やはり壺つぼをいじりながら、「夜があけると、その男が、こうなるのも大方宿世すくせの縁だろから、とても事に夫婦みよととになつてくれと申したそうでございます。」

「成程。」

「夢の御告おほしめげでもないならともかく、娘は、観音様のお思召おほしめし通りになるのだと思つたものでござい

ますから、とうとう首かぶりを豎たてにふりました。さて形ばかりの盃さかづき事をすませると、まず、当座の用にと云つて、塔の奥から出して来てくれたのが綾あやを十足びきに絹きぬを十足びきでございます。——この真似まねばかりは、いくら貴方あなたにもちとむずかしいかも存じませんな。」

青侍は、にやにや笑うばかりで、返事をしない。驚も、もう啼なげかなくなつた。

「やがて、男は、日の暮くに帰ると云つて、娘一人を留守居るすいに、慌あわしくどこかへ出て参りました。その後の淋しみしさは、また一倍でございます。いくら利発者でも、こうなると、さすがに心細こまくなるのでございましょう。そこで、心晴なげらしに、何気なにげなく塔の奥へ行つて見ると、どうでございましょう。綾あやや絹きぬは愚おろかな事、珠玉たまごとか砂金さきんとか云う金目かねめの物が、皮匣かわびに幾つともなく、並べてあると云うじやございませぬか。これにはああ云う気丈きぢやうな娘でも、思わす肚胸とむねをついたそうでございます。」

「物にもよりますが、こんな財物たからを持つているからは、もう疑うたがはございませぬ。引剥ひはぎでなければ、物盗ものどりでございます。——そう思うと、今まではただ、

さびしいだけだったのが、急に、怖いのも手伝わ  
て、何だか片時もこうしては、いられないような氣  
になりました。何さま、悪く放免の手にでもかかろ  
うものなら、どんな目に遭うかも知れませぬ。

「そこで、逃げ場をさがす氣で、急いで戸口の方へ  
引返そうと致しますと、誰だか、皮匣の後から、し  
わがれた声で呼びとめました。何しろ、人はいない  
とばかり思っていた所でございませぬから、驚いた  
の驚かないのじやございませぬ。見ると、人間とも  
海鼠ともつかないようなものが、砂金の袋を積んだ  
中に、円くなつて、坐つて居ります。——これが目  
くされの、皺だらけの、腰のまがつた、背の低い、  
六十ばかりの尼法師でございませぬ。しかも娘の  
思惑を知つてか知らないでか、膝で前へのり出しな  
がら、見かけによらない猫撫声で、初対面の挨拶を  
するのでございませぬ。

「こつちは、それ所の騒ぎではないのでございませ  
ぬが、何しろ逃げようと云う巧みをけどられななどして  
は大変だと思つたので、しぶしぶ皮匣の上に肘をつ  
きながら心にもない世間話をはじめました。どうも

話の容子では、この婆さんが、今まであの男の炊女  
か何かつとめていたらしいのでございませぬ。が、男  
の商売の事になると、妙に一口も話しませぬ。それ  
さえ、娘の方では、氣になるのに、その尼がまた、  
少し耳が遠いと来ているものでございませぬから、一  
つ話を何度となく、云い直したり聞き直したりする  
ので、こつちはもう泣き出したいほど、氣がじれま  
す。——

「そんな事が、かれこれ午までつづいたでございま  
しょう。すると、やれ清水の桜が咲いたの、やれ五  
条の橋普請が出来たのと云つている中に、幸い、年  
の加減か、この婆さんが、そろそろ居睡りをはじめ  
ました。一つは娘の返答が、はかばかしくなかつた  
せいもあるものでございませぬ。そこで、娘は、折  
を計つて、相手の寢息を窺いながら、そつと入口ま  
で這つて行つて、戸を細目にあけて見ました。外に  
も、いい案配に、人のけはいはございませぬ。——  
「ここでそのまま、逃げ出してしまえば、何事もな  
かつたのでございませぬが、ふと今朝貰つた綾と絹と  
の事を思い出したので、それを取りに、またそつと



皮匣かわじの所まで帰つて参りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまずいて、思わず手が婆さんの膝ひざにさわつたから、たまりませぬ。尼の奴め驚いて眼をさますと、暫くはただ、あつけにとられて、いたようでございますが、急に気がいひのようになつて、娘の足にかじりつきました。そうして、半分泣き声で、早口に何かしやべり立てます。切れ切れに、語ことばが耳へはいる所では、万一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇うかも知れないと、こう云つてゐるらしいのでございませぬ。が、こつちもここには命にかかわると云う時でございませぬ。元よりそんな事に耳をかす訳がございませぬ。そこで、とうとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

「打つ。蹴ける。砂金の袋をなげつける。——梁はりに巢ねすみを食つた鼠ねずみも、落ちそうな騒さわぎでございませぬ。それに、こうなると、死物狂いだけに、婆さんの力も、莫迦ばかには出来ませぬ。が、そこは年のちがいでございませぬ。間もなく、娘が、綾と絹とを小脇こわきにかかえて、息を切らしながら、塔の戸口をこつそり、

忍び出た時には、尼あまはもう、口もきかないようになつて居りました。これは、後あとで聞いたのでございませぬ。死骸しがいは、鼻から血を少し出して、頭から砂金を浴びせられたまま、薄暗い隅の方に、仰向けあおむになつて、臥ねていたようでございます。

「こつちは八坂寺やさかでらを出ると、町家の多い所は、さすがに気がさしたと見えて、五条京極きよぎやくの知人しりびとの家をたずねました。この知人と云うのも、その日暮しの貧乏人なのでございませぬ。絹の一疋もやつたからでございませぬ。湯を沸かすやら、粥かゆを煮るやら、いろいろ経営けいえいしてくれたようでございます。そこで、娘も漸ようやく、ほつと一息つく事が出来ました。」

「私も、やつと安心したよ。」  
青侍あおざむらいは、帯にはさんでいた扇あおぎをぬいて、簾すだれの外の夕日を眺めながら、それを器用に、ぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁はくちようが五六人、騒々しく笑い興きんじながら、通りすぎたが、影はまだ往来に残のこつてゐる。……

「じゃそれでいよいよけりがついたと云う訳だね。」  
「所ところが」翁おきなは大仰おほむねに首を振つて、「その知人しりびとの家に居

りますと、急に往來の人通りがはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵り合う声が聞えます。何しろ、後暗い体ですから、娘はまた、胸を痛めました。あの物盗りが仕返ししにでも来たものか、さもなければ、検非違使の追手がかかりでもしたものでか、——そう思うともう、おちおち、粥を啜つても居られませぬ。」

「成程。」

「そこで、戸の隙間から、そつと外を覗いて見ると、見物の男女の中を、放免が五六人、それに看督長が一人ついて、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれて、繩にかかった男が一人、所々裂けた水干を着て烏帽子もかぶらず、曳かれて参ります。どうも物盗りを捕えて、これからその住家へ、実録をしに行く所らしいのでございますな。」

「しかも、その物盗りと云うのが、昨夜、五条の坂で云いよつた、あの男だそうじゃございませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて来たそうでございます。これは、当人が、手前に話しました——何も、その男に惚れていたの、どうしたの

と云う訳じやない。が、その縄目をうけた姿を見たから、急に自分で、自分がいじらしくなつて、思わず泣いてしまつたと、まあこう云うのでございますがな。まことにその話を聞いた時には、手前もつくづくそう思いましたよ——」

「何とね。」

「観音様へ願をかけるのも考え物だとな。」

「だが、お爺さん。その女は、それから、どうにかやつて行けるようになったのだろう。」

「どうにか所か、今では何不自由ない身の上になつて居ります。その綾や絹を売つたのを本に致しましてな。観音様も、これだけは、御約束をおちがえになりませぬ。」

「それなら、そのくらいな目に遇つても、結構じやないか。」

外の日の光は、いつの間にか、黄いろく夕づいた。その中を、風だつた竹藪の音が、かすかながらそここから聞えて来る。往來の人通りも、暫くはとだえたらしい。

「人を殺したつて、物盗りの女房になつたつて、す

る気でしたんでなければ仕方がないやね。」

青侍は、扇を帯へさしながら、立上った。翁も、

もう提の水で、泥にまみれた手を洗っている——二人

人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心

もちとに、物足りない何ものかを、感じてでもいる

ような容子である。

「とにかく、その女は仕合せ者だよ。」

「御冗談で。」

「まったくさ。お爺さんも、そう思うだろう。」

「手前でございますか。手前なら、そう云う運は

まっぴらでございませぬ。」

「へええ、そうかね。私なら、二つ返事で、授けて

頂くがね。」

「じゃ観音様を、御信心なさいまし。」

「そうそう、明日から私も、お籠でもしようよ。」

(大正五年十二月)

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和 61）年 9 月 24 日第 1 刷発行

1995（平成 7）年 10 月 5 日第 13 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

入力：j.utiyama

校正：earthian

1998 年 11 月 11 日公開

2004 年 3 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。